

令和四年度諸調査結果について

【全国学力・学習状況調査(小6・中3)】全教科で全国上回る
【標準学力検査(NRT)(小4・中2)】中2数学・英語に課題

全国学力・学習状況調査

《平均正答率の状況》

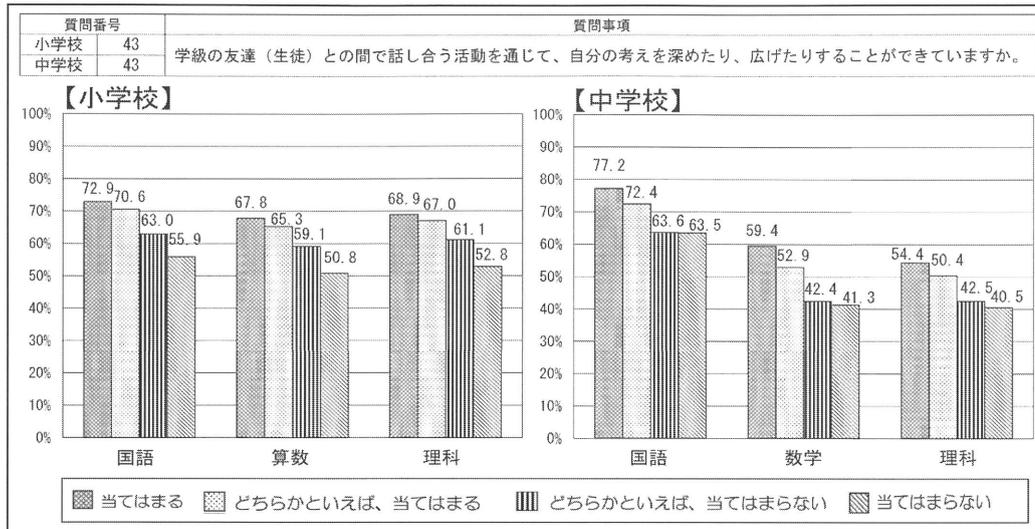
盛岡市の平均正答率は、小中学校全ての実施教科において、全国平均を上回る結果となりました。各学校における日頃の授業の成果であると捉えています。

平均正答率	小6		中3	
	盛岡市	全国	盛岡市	全国
国語	70 (107)	65.6	73 (106)	69.0
算数 数学	65 (103)	63.2	54 (105)	51.4
理科	66 (104)	63.3	51 (104)	49.3

()内の数値は、全国平均正答率を100としたときの割合を表す

【表1】全国学力・学習状況調査各教科平均正答率(全国比)

《質問紙調査の分析・活用》
学校質問紙調査・児童生徒質問紙調査の結果には、各学校における教育活動の成果が、各質問項目における肯定的回答の割合となって表れています。



【表2】児童生徒質問紙「学級の友達(生徒)との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」への回答状況と各教科正答率

この質問紙調査結果と教科の平均正答率とのクロス集計及び分析を行い、学力との間に一定の関係が見られる項目を確認し、実際の状況とよく照らし合わせながら分析すること、指導改善の手がかりを得ることができま

【表2】は、

盛岡市学力向上推進事業における検証項目「授業において、主体的・対話的で深い学びを促す教師の関わり」

について、質問紙への回答状況と各教科正答率との相関を表したものです。

全ての教科において、肯定的回答をした児童生徒の正答率が、否定的回答をした児童生徒の正答率を一割程度上回っています。

各校において、同様の分析を実施し、実態に即した授業改善の手立てについて、協議・検討の上、実践の充実に繋げていくことが期待されます。

標準学力検査(NRT)

標準学力検査(NRT)における、本市の児童生徒の状況は、下の【表3】のとおりです。

本市の偏差値平均は、小4の国語、算数、中2の国語で全国平均(50)を上回りましたが、中2の数学及び英語では、全国平均を下回る結果となりました。

各校では検査結果を踏まえ、次の2点に留意し、「今後の指導の方向性」について明確にし、当該学年・当該教科に限らず、校内体制で授業改善につなげていく必要があります。

教科	偏差値平均	標準偏差	5段階分布(%)					
			評定1	評定2	評定3	評定4	評定5	
小学校	国語	53.1	9.9	5	15	30	40	11
	算数	52.4	10.5	7	16	29	37	12
中学校	国語	51.0	9.0	4	20	38	33	5
	数学	49.4	11.3	11	24	28	27	11
	英語	48.8	10.9	9	29	32	22	9

【表3】標準学力検査(NRT)の検査結果

※偏差値 (評定1) 34 (評定2) 35~44 (評定3) 45~54 (評定4) 55~64 (評定5) 65~

《学力のばらつきを分析する》

得点の散らばりを表す数値『標準偏差』(SD)の全国平均は「10・0」です。これより数値が大きい場合は、データのばらつきが大きく、様々な学力の児童生徒が散在している状況です。一方で、数値が小さい場合は、ばらつきが小さい、つまり、学力がある程度そろっている集団状況と捉えることができます。

標準偏差が大きい場合は、児童生徒個々の学力にばらつき

評定	標準的な分布 (%)	現状の捉え	
		指導の指針	
5	7	非常に高い学力水準にある。	応用・発展的な課題に取り組ませるのもよい。
4	24	高い学力水準にある。	集団の一斉指導でも学力向上が期待できる。
3	38	平均的な学力水準にある。	学習が遅れがちとなる児童生徒に個別に配慮しつつ、一斉指導の充実を図る。
2	24	平均より低い学力水準にある。	集団の一斉指導では学習が遅れがちとなる恐れがあるので配慮が必要。
1	7	平均よりかなり低い学力水準にある。	個別の支援が必要である。

【表4】評定1～5の標準的な分布と指導の指針(例)
※参考 「学力分析ツール 分析方法を知る」(図書文化)

「現状の捉え」と「指導の指針」を参考にしながら、実際の集団の状況を踏まえ、授業改善を図っていくことが求められます。

今回紹介した全国学力・学習状況調査及び標準学力検査の結果を踏まえた授業改善の充実に向けて、「児童生徒一人一人に資質・能力を育成することを目指した授業改善の推進」が求められます。

盛岡市教育委員会では、学方向上推進事業の土台となる「小中一貫教育の推進」の観点から、三つの柱に整理された「目指す資質・能力」を、小中で共有することによる「資質・能力ベースの小中連携」を推進しています。

その上で、授業実践レベルでの具現化が求められます。「目標を学習指導案にどのよう位置付ければ良いか」「授業研究会を実施する際の協議の視点として、何を、どのように設定すれば良いか」等、その方法は様々考えられます。次に、その推進の際の視点となる二点について確認し

学力向上の取組について

評定5段階それぞれにある「現状の捉え」と「指導の指針」を参考にしながら、実際の集団の状況を踏まえ、授業改善を図っていくことが求められます。

今回紹介した全国学力・学習状況調査及び標準学力検査の結果を踏まえた授業改善の充実に向けて、「児童生徒一人一人に資質・能力を育成することを目指した授業改善の推進」が求められます。

盛岡市教育委員会では、学方向上推進事業の土台となる「小中一貫教育の推進」の観点から、三つの柱に整理された「目指す資質・能力」を、小中で共有することによる「資質・能力ベースの小中連携」を推進しています。

その上で、授業実践レベルでの具現化が求められます。「目標を学習指導案にどのよう位置付ければ良いか」「授業研究会を実施する際の協議の視点として、何を、どのように設定すれば良いか」等、その方法は様々考えられます。次に、その推進の際の視点となる二点について確認し

ます。

《学級(集団)づくりの一層の充実を》

一つ目は「学級経営(教科経営を含む)の充実」についてです。「児童生徒個々の学力が向上した結果として、集団の学力が向上する」という考え方と合わせて、「集団の学力を高めることが、個々の学力向上につながる」という考え方もあります。

個の力をよりどころとして、自力で学習することも大切ですが、個々の力が結集することで相乗効果が生まれ、より高次の学びが実現するという考え方です。

その実現のために参考となる視点として、『令和4年度学校教育指導指針』(岩手県教育委員会)の「教科指導における生徒指導」では、下の

これからの視点から学級経営の在り方を見つめ直し、児童生徒の発言の引き出し方や受け止め方、つなぎ方について、教職員間で確認したり、学び合ったりする機会を設定してみてはいかががでしょうか。

■教科指導における生徒指導

- 児童生徒一人ひとりのよさや得意分野を積極的に生かし、授業の場で児童生徒に居場所をつくる。
- 個に応じた指導、発問や指示の構成などの指導方法、チーム・ティーチングなどの指導体制を工夫・改善することでわかる授業を行い、児童生徒が学習に対して自ら目標や課題をもち、主体的に問題解決していくことができる資質や能力を育成する。
- 友だちと学び合う場を設定し、友だちの考えを認めたり支えたりすることにより、共に学び合うことの意義と大切さを実感できるようにする。

岩手県教育委員会「令和4年度学校教育指導指針」P.21から抜粋

《三つの資質・能力の育成を基軸とした授業づくり》

二つ目は「三つの資質・能力の育成によるカリキュラム・マネジメントの充実」についてです。

児童生徒相互の学び合いが相乗効果を生み出すのと同様

に、教職員が、育成を目指す児童生徒像と、その実現のための手立てを共有し、日々の実践にあたるのが、授業改善には有効です。

学習指導要領では、各教科等の目標が、三つの資質・能力で整理されています。それを受けて、各教科等の目標と学校教育目標との関連を明確にした「ブランドデザイン」を作成し、それを校内研究会等を通して、全職員で共有を図る取組が求められています。その取組をとおして、カリキュラム・マネジメントがよりイメージしやすいものとなってきました。

今後、各教科等で育成を目指す資質・能力をつなぎあわせながら、学校として育成を目指す資質・能力を三つの柱で整理していくことで、学校教育目標の実現に向けた方策についての視覚化・共有化が容易になってきます。

今後の各学校における学方向上の取組推進において、改めて、「三つの資質・能力」の視点から、目指す児童生徒の姿を確認しましょう。